

る。全般的に見て会が発展の一途をたどつて来ているのは、喜ばしいが、まだできていないこともたくさんある（本誌8巻3号所載賛助会員募集趣意書参照）。事務上その他のことでわれわれの至ら

なかつたことも多いであろう。科学技術振興が特に強く叫ばれている今日、われわれの会も、会員全体の会としますます発展するよう、われわれも努めてゆきたいと思つている。

年

表

明治10年(1877) この年の始め、在京の数学者が相会して‘数理の開進を計る’ことを協議した。

9月 神田孝平、柳橋悦主唱となり**東京数学会社**を創立することとなる。神田、柳両氏が社長となり、塚本明毅、岡本則録、川北朝鄰、荒川重平、寺尾寿、菊地大麓など大いに会務に務めた。

10月 この月から毎月定会を湯島昌平館で開くことになった。ドイツ人センデル氏の講義がその嚆矢である。

11月 **東京数学会社雑誌**第1号を発行した。和紙にて菊判半載、14葉(28頁)縦組木版刷。以後毎月発行されることになった。(翌年第6号から二十数葉となった)。専ら‘社員’からの設問と解答とを掲載し、後には訳語会で決定した訳語も収録した。第1号、第2号には問題は次のような分類の下に収められている。

(1) 算数雑問 (2) 代数学雑問 (3) 幾何学 (4) 三角術 (5) 代微積雑問 (6) 静力学 (7) 動力学 (8) 英国大学校数学試験問題 (9) 本朝数学。分類の名称は7号から(4)が三角法に、(5)が微分積分法に、(6)、(7)が重学に改められ、円錐曲線法、代数幾何学、微分方程式が順次加えられるようになった。

社員たることを希望するもの114名に及んだ。

12月 社則を定める。わずか6ケ条で、常員の他に、例会の際の臨時出席者を臨時員と呼ぶといった具合に、会員の種別と雑誌配布についての簡単な規定である。常員は入社金1円を納め、毎月20銭の会費を納めることとなった。常員となったもの55名。

明治11年(1878) 3月 柳橋悦洋行のため岡本則録社長となる。

9月 東京数学会社雑誌第9号から活版刷となった。

11月 以後例会では、毎回講義、演説をすることになり、岡本則録、菊地大麓、川北朝鄰、大伴兼行らが講義を行つた。

明治12年(1879) 10月 このころ会の不振を挽回するため委員を設けて雑誌の編集を行い、書記生を置いて雑誌の郵送、会費の収納を行わせることにきめた。この月会員66名。

11月 委員12名を選挙した。以後委員や有志が日本橋区呉服町‘柳屋’に会して雑誌発行について協議をした。

明治13年(1880) 4月以後京橋区日吉町の共存同衆館で例会を行うことになる(翌年9月からは東京大学にて)。

5月 社則を改訂して23ケ条から成るものとした。

第1条 本社ハ数学測量天文ノ學術ヲ研究鍊磨シ数理ノ開進ヲ以テ専務トス。

第3条 常員ハ会場ニ出席スル者通信員ハ遠國ニ在テ社則ヲ遵守スル者客員ハ数理有名者ニシテ社員協議ノ上社員に聘スル者。

第5条 毎月第一土曜日ヲ以テ集會定日トシ午後一時ヨリ集合ス。

第6条 社員ハ毎月定費トシテ一円ヨリ多カラス式拾銭ヨリ少ナカラサル金ヲ納ムルコトヲ要ス。

第9条 本社ハ数理ヲ研究スルカ為メニ設ケタル者ナレバ数学ヲ教授スルコトヲ為サズト雖ドモ社員ハ勿論広ク世間ノ質問ニ応シ之ガ答弁ヲ為スベシ質問ノ事項通常ナルモノハ学務委員之ヲ担当シ六十日ヲ限リ之ヲ答弁ナシ其事項高尚ナル者ハ普ク社員ニ通知シ其答ヲ募リ九十日間ヲ限リ質義者ニ答フ可シ其理深遠ニシテ解シ難キ者ハ広ク字内ノ数理大家ニ解義ヲ請フテ質義者ニ答フルコトアルベシ。

第10条 新發明ノ測器類及ヒ其他ノ器械ヲ試験シ其利害得失ヲ弁明スル等ノコトモ又前条ニ比準スヘシ。

第11条 公私立中学校ニ於テ数学教員撰挙ノ時其試験ヲ本社ニ請フトキハ委員協議ノ上之ヲ弁スベシ。

第12条 数学教員測量者等ノ雇入試験ヲ本社ニ請フトキモ前条ニ比準スベシ。

第17条 社長ハ本社一切ノ事務ヲ総理シ委員以下ヲ誘導シ尽力其当ヲ得セシメ本社興廃存亡ヲ以テ自任ス。

その他 入社は社員1名以上の保証のあるものについて委員の協議によつて許可され、入社金1円を収めること。毎月雑誌一号を発行して社員に配達すること。学術委員、事務委員を設けることなどが定められた。

7月 社則 第9条にある学務委員を定め、受持を次のように定めた。

算術・代数学：山本信実、川北朝鄰

幾何・三角法：中川将行、荒川重平、伊藤直温

球面三角法・星学・航海学：磯野 健、肝付兼行

代 微 積：岡本則録、赤松則良

三軸法・重学：菊地大麓

本 朝 数 理：大村一秀、福田理軒、川北朝鄰

(測器類の試験：磯野 健、肝付兼行)

8月 訳語会会則を定め、9月から毎月共存同衆館で訳語会を開いた。9月の訳語会では始めて次の訳語を議定した。Quantity 量, Number 数, Abstract number

不名数, Concrete number 名数などを決め, Unit の訳語は‘紛々決せず’と記されている. 以後訳語会毎に十数語の訳語を決定した. これらの訳語およびその決定のための討論は, 雑誌 42 号付録(明治 14 年 12 月), 44 号付録(明治 15 年 2 月)に収録.

明治 14 年(1881) 1 月—3 月 訳語会にて Analysis 解析法, Fraction 分数, Continued fraction 連分数, Prime number 素数, Term 項などを決める. Definition は界説と定められた.

5 月 東京数学会社雑誌第 35 号から菊判西洋紙, 縦 2 段組となつた.

9 月 以後例会を東京大学で行うことになる. この項仮事務所は東京麹町区富士見町 2 丁目 29 番地にあつた.

12 月 Algebra の訳語は代数学に決定(‘点竄’という主張もあつたが, 既に用いられている代数学を採用した).

明治 15 年(1882) 1 月—3 月 訳語会にて, Unit 単位, Mathematics 数学を決定(川北朝鄰, 菊地大麓は数理学の語を主張した), Arithmetic の訳語は算数学, 算数術, 算術などの意見あり, 算術に決定. Degree を次と訳し, Dimension の訳語としては元, 元行などの案あり行と決定.

明治 17 年(1884) 5 月 菊地大麓の動議により, 物理学(星学を含む)を攻究するものも含めて社を拡張し, 東京数学物理学会とすることを討議した.

6 月 東京数学物理学会成立, 毎月(5 月, 8 月を除く)第一土曜日に常会を開き, 毎年 5 月第一土曜日に年会を開くことに定められた. 会場は東京大学.

入会金 1 円, 会費毎月 20 銭と定められる.

委員長の選挙を行う. 最高得票の菊地大麓洋行予定のため, 次点の村岡範為馳が初代委員長となる. 東京数学会社雑誌 67 号をもつて終刊となる.

10 月 山川健次郎らの動議(7 月)により, 関賞牌規則ができた. 曰く‘関賞牌ハ関先生ノ芳名ヲ不朽ニ伝エ且数学ノ進歩ヲ奨励スルタメ数学上功績アル本邦人ニ授与スル者トス’. 資金は有志の義捐金によることとし賞牌の地金は金 9 銅 1 のものと定められた. この頃会員総数 82 名.

明治 18 年(1885) 2 月 東京数学物理学会記事第 1 巻刊行. 四六判縦組. 編輯者: 山川健次郎, 寺尾寿, 川北朝鄰, 荒川重平, 村岡範為馳, 菊地鋳吉郎. 発兌書肆: 丸屋善七(現在の丸善), 土屋忠兵衛とある. 東京数学会社創立以来の毎月の詳細な事務記録の他, 山川健次郎: 分光器観測法小引, 寺尾寿: 岩田好算翁の問題の別解並に敷衍, 志賀泰山: 酸化窒素及び酸化炭素を液化するの試験, 山川健次郎: 電気単位決定報告(明治 17 年 4 月パリにおける万国電気公会における決定の報告), 沢田吾一: 雨中彈道等の講演を掲載した.

7 月 隈本有尚, 北尾次郎の動議にて会の記事はローマ綴にて記されることになる.

明治 19 年(1886) 9 月 東京物理学会記事(以下記事と略す)第 3 巻を TŌKYŌ SŪGAKU BUTURI GAKU KWAI KIJI なる表題のもとに発行す. 会務の記事はすべてローマ字書き. 学術的報告論文はローマ字書きと文に改めたものもあり, 英文のものもあつた. 論文には田中館愛橋, 山川健次郎らがローマ字書きに直したことが付記されている. 記事の表題ローマ字書きはこの後, しばしば綴りが改められている.

明治 20 年(1887) 6 月 入会金 1 円, 会費年 2 円と定められた. 会員数 94 名.

この年記事第 4 巻第 1 号菊判の大きさになる. 刊行が不規則となり遅れ勝ちになる. 第 4 巻からは外国の文献の翻訳, 紹介が掲載されることになつた.

藤沢利喜太郎訳: Dirichlet の論文 (Crelle's J. Vol. 17)

フランス語からの英訳.

三輪桓一郎訳: Abel の論文 (Crelle's J. Vol. 1)

フランス語からの英訳.

菊地大麓訳: Gauss の論文 (全集第 3 巻)

ラテン語からの英訳.

長岡半太郎訳: Kummer の論文 (Crelle's J. Vol. 15)

ドイツ語からの英訳.

これらを取りまとめ明治 24 年(1891)に Memoirs on Infinite Series の表題の下に単行書として刊行した.

明治 22 年(1889) 10 月 沢田吾一に関賞牌が授けられた. この授賞はこのとき一回行われたのみであつた.

明治 24 年(1891) 1 月 創立者柳橋悦(1832—1891^{1/15})歿.

明治 25 年(1892) 記事第 5 巻を発行す. 巻頭に Kronecker (1823^{12/7}—1891^{12/20})の写真を掲げ, 藤沢利喜太郎による追悼文を載せた.

Texas 大学教授 G. B. Halsted の英訳にかかる N. Lobatschewski: The theory of parallels, J. Bolyai: The science absolute of space が菊地大麓の尽力によつて転載された.

明治 26 年(1893) 4 月 会員 108 名.

明治 27—28 年(1894—95) (日清戦争)

明治 29 年(1896) 7 月 記事第 7 巻を発行. W. K. Clifford の英訳による Riemann の論文 On the hypothesis which lie at the bases of geometry を‘Nature’誌第 8 巻から転載.

この巻に日本の算家譜略(寛政 13 年水戸彰考館の小沢正容識)を掲げた. 川北朝鄰は関流宗統修業免状の全文を寄せた.

この年から藤沢利喜太郎教授セミナー演習録を出版(以後明治 33 年(1900)の第 5 冊にまで及ぶ).

明治 31 年(1898) 創立者神田孝平(1830—1898)歿.

明治 33 年(1900) 12 月 このころ‘記事’の刊行はなはだ不規則となり, 明治 29 年(1896) 5 月から, 明治 33 年(1900) 2 月までの記事が漸くこの年刊行の第

8巻の6冊にわたって掲載された。

明治34年(1901) 6月 Tōkyō Sūgaku Buturigakkwai Hōkoku のタイトルのもとに毎月事務概要或は講演概要なる簡単な記事を主として邦文によつて掲載し毎月刊行することになる。

明治36年(1903) 12月 上記雑誌表題の Hōkoku を第2巻第7号から Kiji-Gaiyō と改めた。以後次第に事務概要は邦文一頁程度に止まり、講演概要は数頁に及ぶようになった。

明治37~38年(1904~05) (日露戦争)

明治38年(1905) 3月 Kiji-Gaiyō 第2巻第20号から Proceedings of the Tōkyō Physico-Mathematical Society なる副題が付けられた。

明治40年(1907) 1月 雑誌の表題 'Kiji-Gaiyō' を第3巻をもつて廃止し、第4巻から Tōkyō Sūgaku-Buturigakkwai Kiji, Dai 2 Ki (副題 Proceedings of the Tokyo Mathematico-Physical Society, 2nd Series) と改められた。漸く今日のような学術雑誌としての体裁もとのつて来た。(8月を除く月刊, 2ヶ年にわたる22冊をもつて一巻とした, 第4巻466頁, 第5巻460頁。)

4月 関孝和二百年祭を行う。川北朝鄰の式辞および遠藤利貞の演説あり。

学術通俗講演会を行う。これは明治42年(1909)頃まで、年会の際に行われ、その講演集が刊行された。

9月 関流算法七部書を刊行。

12月 関孝和に従四位の贈位あり(11月), 菊地大麓他有志により、東京牛込浄輪寺において贈位奉告祭が行われた(12月6日)。関先生二百年忌記念本朝数学講演会が東京神田一ツ橋の東京高等商業学校大講堂にて行われた(12月5日)。

明治41年(1908) 3月 上記の本朝数学講演会の講演集が刊行された。藤沢利喜太郎、林鶴一、狩野享吉、菊地大麓、川北朝鄰、遠藤利貞の講演が収録されている。

明治42年(1909) 3月 TŌKYŌ SŪGAKU-BUTURI GAKU KWAI KIZI (第1期) は第9巻第1号(明治35年8月)をもつて久しく中絶の状態であつたが、明治34年1月から39年12月に至る事務、講演の記録を収めて第9巻第2号を刊行し、これをもつて第1期(1st Series)の終刊と定めた。

明治44年(1911) (東北数学雑誌 — The Tōhoku Mathematical Journal 創刊)

大正3~7年(1914~18) (第1次世界大戦)

大正4年(1915) 3月 雑誌 'Kiji' 所載の事務記録をローマ字書きとすることを止めた。

大正6年(1917) 8月 菊地大麓(1855^{8/17}—1917^{8/19})歿。藤沢利喜太郎による英文の追悼文を 'Kiji' に掲げた。

大正7年(1918) 4月 委員長長岡半太郎から、会名

を日本数学物理学会とする意見が出された。会員が多数となり、全国に散在するようになったからである。

5月 蘆野敬三郎、平山清次らは '日本物理学会' と改称することを提議。

6月 会名の変更については常会出席者だけでなく、全会員に諮るのが妥当であるとの意見が出て、そのため会則の一部を変更した。

9月 会名変更案が正式に常会に上提され、日本数学物理学会とする案が通過し、同会が成立した。会員数439名。

大正8年(1919) Nippon Sūgaku-Buturigakkwai Kizi, Dai 3 Ki (Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan, 3rd Series) 創刊。四六倍判, 8月を除く月刊, 各冊は10~40頁。一年毎に巻数を改めることになる。

大正12年(1923) (関東大震災)

大正15年, 昭和元年(1926) 12月 Kiji 第8巻第11号から1年間大正天皇の崩御のため表紙を黒枠刷としている。

昭和2年(1927) 9月 和文の機関誌日本数学物理学会誌を創刊。主として総合報告、外国文献の紹介が収められることになった。

昭和3年(1928) 4月 本会創立50周年記念大会が行われ、委員長中村清二が記念演説を行い、'創立以来50年の歴史について報告した'。

昭和8年(1933) 12月 藤沢利喜太郎(1861^{9/9}—1933^{12/27})歿。

昭和14~20年(1939~45) (第2次世界大戦)

昭和16年(1941) 2月 社団法人の組織をとる。

昭和19年(1944) 大戦のため Nippon Suugaku-Buturigakkwai Kizi は第26巻第3~4号をもつて事実上の終刊となる。日本物理学会誌は第18巻(昭和18年)をもつて事実上の終刊。

昭和20年(1945) この年1月および11月は講演申込者皆無のため常会を中止。2月, 3月は空襲のため常会を中止。4月年会を中止。

10月 大戦中に失われた学会としての機能を復活し、より以上に活潑にするため、数学会と物理学会の二学会に分離することが、理事長清水武雄より提案された。

12月 日本数学会と日本物理学会とに分離することを臨時総会において決定。

昭和21年(1946) 4月 日本物理学会創立。

6月 日本数学会創立総会が行われた。当時の会員751名。

昭和22年(1947) 4月 邦文機関誌数学創刊。岩波書店から発行。数学辞典の編集が企画された。

昭和23年(1948) 9月 Journal of the Mathematical Society of Japan 創刊。

昭和26年(1951) 5月 Journal Vol. 3 No. 1 を高木貞治教授喜寿記念号とした。

昭和 27 年 (1952)	5 月	社団法人の組織をとる.	1918 (大 7)	日本数学物理学会	439	7
昭和 29 年 (1954)	7 月	数学辞典を岩波書店から刊 行した.	1921 (大 10)		529	13
			1931 (昭 6)		1041	41
昭和 30 年 (1955)	7 月	双書 Publications of the Mathematical Society of Japan を創刊.	1941 (昭 16)		1816	153
	9 月	代数的整数論に関する国際シンポジウムが東京 および日光にて開催された.	1945 (昭 20)		2580	9
	12 月	上記シンポジウムのため <i>Journal Vol. 7, Supplement</i> を特集した.	1946 (昭 21)	日本数学会	751	149**
			1947 (昭 22)		1240	237
			1948 (昭 22)		1414	325
			1949 (昭 24)		1400	405
昭和 31 年 (1956)	5 月	'数学' 第 7 巻第 4 号を上記 シンポジウムの特集号とした.	1950 (昭 25)		1193	481
			1951 (昭 26)		1132	520
		(福富節男記)	1952 (昭 27)		1121	587
			1953 (昭 28)		1210	552
			1954 (昭 29)		1365	465
			1955 (昭 30)		1412	543
			1956 (昭 31)		1516	484
			1957 (昭 32)		1566	472
				* 以下 1945 年までは日本数学物理学会の常会, 年会における講演中数学に関するものの数.		
				** 以下日本数学会の春秋の大会における講演数の 合計.		

会員数および講演数の変遷

	会員数	講演数
1877 (明 10) 東京数学会社	55	
1881 (明 14)	59	
1884 (明 17) 東京数学物理学会	82	
1891 (明 24)	94	
1901 (明 34)	175	5*
1911 (明 44)	341	4

東京数学会社雑誌題言

此般数学会社ヲ開立スルノ目的ハ益々斯学ヲシテ開進セシメンコトヲ欲スルニ在リ此学ヲ開進セシメンコトヲ欲スルノ目的ハ実理ヲシテ大ニ人間ニ明ナラシムルニ在リ蓋シ數ハ理ノ証ナリ証明ナラザレハ理顯レズ苟理ノ顯レンコトヲ求メハ數ソレ講明セザル可ケンヤ我邦数学ヲ講スル者古来其人ニ乏シカラズ近世西学開クルニ及テ数学モ亦大ニ進ミ二三傑出ノ名家アリテ出テ東西ノ美ヲ併セ大ニ斯学ノ面目ヲ一新セリト云願フニ昔時武治ノ世士人ト稱スル者専ラ体力ヲ重ンジ智力ヲ重ンセズ儒者仏者皆空理ヲ務メテ実用ヲ務メズ算數ノ事ニ至テハ之ヲ卑シムコト特ニ甚シク視テ以テ商売ノ事トシ之ヲ度外ニ措クニ至レリ方今其風漸ク除ケリト雖モ余習未ダ尽ク去ラス常人ハ論ナキノミ文武ノ職ニ居リ教導ノ任ニ當リ号シテ君子學士ト稱スル者ト雖モ往々数学ヲ講セス唯ニ講セサルノミナラス講セザルヲ以テ辱トナササルニ至ル是數明ナラザレバ理顯レザルコトヲ知ラザルヲ以テナリ然ラハ則チ斯学ノ面目ヲ一新セリト云フ者モ唯其専門有志輩ノ間ニ止マリテ其効未ダ公衆一般ノ実益ヲ為スニ及バズト云フベシ是此会ヲ設ケタル所以ナリ本会既ニ公衆一般数学ノ開進ヲ以テ目的トス乃亦此目的ヲ達スベキ方略ヲ撰バザル可ラズ是ニ於テ会同初議略其端緒ヲ開キ要スルニ力ノ及ブ所ヲ尽サンコトヲ欲スルニ在リ其目曰ク内外古今数学關係ノ書籍ヲ蒐輯スルナリ曰ク各人ノ質問ヲ受ケバ必ズ之ガ答ヲ為ス可キ也曰ク会中不審ノ件ハ弘ク公衆ニ質問ス可キナリ曰ク西洋数学書ヲ翻譯ス可キナリ曰ク既ニ翻譯セル者ハ之ヲ印行ス可キナリ曰ク諸名義訳例等ヲ一定ス可キナリ曰ク毎會議定スル所ハ輯録シテ印行ス可キナリ此等其大略ニシテ細目ノ如キニ至リテハ逐會議定スル所アラントス今議事輯録第一号稿成ル題シテ東京数学会社雑誌ト云フ將ニ割剗ニ附セントス依テ聊立会ノ本志ヲ述ルコトカクノ如シ

明治十年十月

神田孝平識